

技術科教育における同調行動の検討

教育デザインコース 技術家庭領域

王 一婷

1. 問題と目的

生徒がものをつくる活動に取り組む際には、それまでの経験を基盤にしていると考えられる。しかし実際には、ものをつかった経験が少ないまま年齢を重ねる生徒も相当数存在するといえる。このような生徒は、中学校段階のものをつくる活動に対して、どのように取り組んでいるのだろうか。

本研究は、同調行動に着目した。すなわち、ものをつくった経験が少ない生徒は、経験が比較的多い生徒の意見や行動に同調することによって、ものをつくる活動に円滑に取り組むことを可能にしていると仮説を立てた。同調行動とは「自分とは異なる意見・態度・行動を周囲から求められたとき、迷いながらも周りの意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」と定義されている(藤原, 2006)。

2. 先行研究の整理

2.1. 知識獲得の理論

心理学分野では関連する知識同士が集まり(スキーマ; schema)を形成すると考えられている(Bartlett, 1932)。知識の獲得は、学習者の既有知識の集まりに新たな知識を結び付け、取り込むことと解釈される。

2.2. 技術科教育における知識獲得の研究

左田・松浦(1993)は、「ガソリン機関」の授業で知識構造を調査した。技術科の授業における分析を通して、生徒が順次・段階的に知識を獲得していることを実証していると概括される。

このような知識獲得の理論に対し、学習指導の観点から従来の知識獲得理論の3つの問題点を挙げる。①学級集団、②学習期限、③授業の簡素化である。これらの問題の対処として、教師が生徒の同調行動を活用することを提案する。同調行動を活用すれば、経験や知識が比較的少ない生徒は、周囲の生徒の活動と同調

することにより、下位段階まで戻って学び直さなくても課題に取り組むことができると推測される。

2.3. 同調行動の先行研究

坂本(1999)は、中学生の学級集団における同調行動と適応について研究している。藤原(2006)は、同調には「内面的同調」と「表面的同調」がある。田崎(1971)は、同調は集団との基準を回避することによる内的緊張の低減といったポジティブな側面が存在すると論じている。以上のように同調行動に関する先行研究は、人間関係との関連性や、同調行動の質的分類に着目している。学校教育における学習指導の観点からの同調行動の研究は見受けられないようである。

3. 生徒の同調行動の調査

結果及び考察 まず、同調行動を知っているのかどうか質問したところ、調査対象者は、意識的や無意識的に他人の真似をするという趣旨の回答をした。そこで、対象者が同調行動を正確に理解するために、質問者はその定義を説明した。

次に、技術の授業における生徒の同調行動はどのようなものかについて質問した。対象者は、回答に悩み、材料加工において進度が速い生徒が遅い生徒に教えている場面を事例として述べた。普段から同調行動の視点で生徒観察を行っていないことも述べた。また、同調行動が起きる原因について、先の事例を基に質問者が、加工作業に対する理解が不十分であることや、加工作業が不得意であることではないかと意見を述べると、対象者は同意した。

これらの結果を踏まえ、今後はまず、教師が同調行動を理解し、同調行動の視点で生徒観察や授業分析を行う手法を構築することが課題となる。